

新 潮 文 庫

夜と霧の隅で

北 杜 夫 著



新 潮 社

よる ぎり すみ
夜と霧の隅で

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 131 A

昭和三十八年七月三十一日 発行
昭和四十六年三月三十日 十三刷

著 者

北 きた 杜 もり 夫 お

発 行 者 佐 藤 亮 一

行 所

株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替 東京 八〇八番

乱丁 落丁のものは本社又はお買求
め書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

夜 と 霧 の 隅 で

北 杜 夫 著



新 潮 社 版

1592

目次

岩尾根にて	七
羽蟻のいる丘	二七
霊媒のいる町	四五
谿間にて	七三
夜と霧の隅で	一二三

解説 埴谷雄高

夜と霧の隅で

岩尾根にて

その岩場は、遠くから私の目を惹いた。鼠色の岩の肌はところどころ青みがかり、そこに、横から切れこむように幅狭いチムニーが走っていた。

登山路から大分離れて、殊さら岩質を調べにきたりするのは、若い時分に養われた習性に近いものがある。それに私はここ数年、岩らしい岩に接していなかった。つづけて二人の、同じザイルに繋がった仲間を失って以来、強いて山から遠ざかっていたのである。

山の側面に広がった岩場の、突起や亀裂や庇岩を久方ぶりに目で追いながら、石の破片が散乱しているチムニーの根元にたどりついた頃には、すでに巨大な岩塊の妖しい魅力が私を捉えていたらしい。薄暗いチムニーの内壁の岩は湿っていて、だが初めの予想より足場や手懸りに不足はなさそうだ。見上げると、絶壁に刻みつけられた巨大な溝は、次第に狭まりながら途中で折曲って消えている。遠望したときの目算では、チムニーを抜けきる前にトラバースする所が一カ所。そこから草地と岩との半々の場所があり、更におしかぶさるように直立した岩壁に続いている。たとえばハーケンが使えるとしても、果してあそこは登攀可能か？ 勿論それも、ザイル技術をわきまえた仲間がいての話だ。いま私は一人だし、なんの用意もない。

雪のくる前、山はふしぎに明るくなるものだ。澄みきった秋空の下で、重なりあった岩々は乾

燥し、ひとときわ陰影と重量感を増してくる。しかし、その日は雲が低くたれていた。見上げる岩峰は灰色の空に半は頭をさしいれ、湿っぽさに軀をひきしめているように見えた。しばらく佇んでいる間にも、灰一色の曇天と、荒涼とした岩の冷氣が肌にふれ、身体の熱をしずかに奪ってゆく。

やがて私は岩壁の下から離れ、崩れおちた岩の細片の上を、元きた方へ辿りはじめた。見下ろす谿間は、岩の色も冷く、這松の色にも生氣がなかった。鳥の啼声も起らず、なに一つ動かない。と、私の目の前を、小さな黒いものがふわっと横ぎり、足元の石にとまった。一匹の黒蠅であつた。

中部地方の三千メートル級の高山にも蠅は多い。平地にいるクロバエと別に変つた種類ではないが、もっと大きく、もっと不潔に見える。お花畑にも必ず見うけられるし、峨々とした山巔に休んでいてもすぐにやってくる。彼等は我々の後をどこまでも追ってくる下界の使者なのかも知れぬ。

その蠅は、石の上を一センチほどのろのろといざり、一寸肢をこすりあわせ、けだるそうに飛び立った。不快な羽音が私の耳に聞え、それから、世界はふたたび静まりかえつた。あとには、沈んだ色合の岩の群と、雪におおわれる直前の黒ずんだ這松のつらなりがあるばかりである。

私はまた数歩すすんだ。重い登山靴がもうい岩をふみつけ、幾つかの小石が崩れおちた。すると、すぐ下方から二つ三つの蠅が舞いたつた。ふわりと飛びたつて、しばらく宙を漂い、そして

姿を消した。なにかものうげな飛び方、寒気にちちこまったような動作である。私は別に気にもとめなかった。這松の海を避け、右手に立ちはだかった岩を迂回して、さきほどまで辿っていた登山路に引返す積りだった。どんなに背が低そうに見えても、山腹の這松の中に踏みこむことは禁物だからだ。

また蠅がいた。何匹も這松の葉や足許の石にしがみついている。私が進むと、彼等はだるそうに飛びあがり、すぐに舞いおりた。その数が一步すすむごとに増える。私は、冷くひきしまった空気の中に、一種の匂いがまじっているのに気がついた。木の実の醗酵するのに似た匂いである。ふいに、四五メートル先の這松の茂みから、想像を絶した数限りない蠅の群がわきたった。黒い生臭い雲が、いきなり地表から立ちのぼったかに思われ、底ごもりした唸りと共に、その雲は上下にゆれ、左右にひろがり、やがて一匹一匹の蠅の姿が見わけられ、大部分は元の場所に舞いおりたが、幾匹かは私の衣服にもとまった。ゆすったくらいでは飛びたない。さきほどの匂いが、だしぬけに強く鼻をついた。強まってみると嫌な臭気である。と思ううちにそれは消え、もう私の嗅覚には何も伝わってこなかった。私は横の方に動いた。また蠅の雲がわきたち、四方に揺れ、元の場所に集って消えた。重苦しい羽音は、すっかり彼等が見えなくなった後までつづいた。

私は腰をかがめ、蠅の舞いおりたあたり、這松の幹が重なっている中に変った色合のものを見つけた。胡麻粒のように蠅がたかっている白っぽい布地、それから裏底をこちらに向けた

靴、——人間の足にちがいはなかった。あとの部分がどうなっているかはわからない。私は反射的に二三歩とびさがり、足許の石がくずれ、むこうでは蠅の群がとびたつた。なお私は何歩か後ずさりし、小さな、生臭い、羽のある黒い生物が空中から消えるのを待った。

やがて静寂が、見渡すかぎりの岩と這松の世界を支配した。私の鼓動だけが、頑丈な靴をはいた足に伝わり、踏みしめている岩に伝わった。

私はそろそろと反対の方に歩きだした。ずっと下方の谿間、灌木林のあたりに鳥影らしいものが浮んですぐに見えなくなった。それきりである。なんの物音もしない。私は石を一つ拾い、さっきの場所を目がけて投げた。黒い雲がたしかに湧き立つのが見えた。彼等の羽音はここまでは伝わってこない。が、その不快な感じだけは、はっきりと私の耳を打った。私は二つ三つの小石を拾い、今度は別の方角にむかって出鱈目に投げた。反応はない。一つだけが岩にあたり、確実な響きを残して宙にはねかえり、斜面を蔽った這松の海に音もなく呑みこまれていった。

私は背のリュックザックをゆりあげ、その重さを確めた。身体のみきを変え、足場を探りながら歩きはじめた。

元の登山路にたどりついてからも、なにか漠然とした知覚が私を取りまいてにすぎなかった。厩大な岩山の立体感が、ちっほけな感情の動きなどは呑みこんでしまうのかも知れぬ。私は足元に目を落し、せかせかと歩いた。十五分ほど歩いてから、道端にザックをおろし、そのわきに腰を下ろした。極めて生理的な空腹を覚え、ベーコンの塊りを取りだし、ナイフで切りとつ

た薄い脂身を口にほうりこんだ。最後に残った脂肪の繊維が胸をむかつかせたので、指でつまんで捨て、アルミニウムの蓋についだウイスキーを飲みくだした。私は二三日の山旅ならベーコンとウイスキーだけで過す習慣である。機械的にもう一切ベーコンを切りとったが、口にする気になれず、白い脂身を見るのも嫌で、紙にくるんでルックザックに藏いこんだ。その代り私は何杯か立続けにウイスキーを飲んだ。疲労と稀薄な空気のため、酔が急速に体内に沁みとおってゆくのを感じた。

すでに屍体のころがっていた這松の辺りは見えす、チムニーの上部は角度を変えてずっと凡庸に見えるにすぎない。だが、その上方に続く岩場は、以前よりも露わに、真向から垂直に切りたっている。ここからは見えぬが、その背後が山頂の筈であった。登山路は大きく迂回しながら、絶壁を避けて這松の間をうねうねと続いているのである。

舌先に快い刺戟を覚えながら、私は呆けたようにウイスキーを嘗めた。ときどき腕時計に耳をつけ、かすかな響きが着実に時を刻んでいるのに聞きいった。

私の意識は極度に狭まっていたから、そのときあの垂直の岩場にとりついている人影を発見できたのは、全くの偶然といってよい。もとより最初は、一匹の虫が石の罅に貼りついているくらいにしか思われなかった。しかし石の罅が風化に荒だった岩壁であり、虫けらが確かに人間だと知れたとき、もし酔が奇妙に心を冷静にしていなかったとしたら、私は声をあげていたかも知わらない。

私はルックザックから常々鳥を観察するための双眼鏡を取りだし、焦点を合せた。丸い視野の中に、ぎざぎざの、凄味のある岩肌が現われ、そこに、股をやや広めに、べったりと吸いついている男がいた。ザイルにつながれている様子もなく、背にはかなり大型のザックを背おったままだ。気狂いわざだ。と私は思った。髪の乱れた頭だけが右左に動いているのがわかる。時が過ぎ、私は双眼鏡を持ちなおし、視野の中の小さな頭がゆらいでいるのを注視した。男は堀に吸いつくやモリそっくりに微動だもしない。やがて、じりじりと左足が持ちあげられ、はだしの爪先が足場を探っているのがわかった。左足の動きが終ると、右手が左手のホールドへ行き、左手が限りなくのろのろと肩幅ほど左方に移り、男の身体は奇術のように半メートルほど上方のしあがった。それから長い休止。

私には相手の鼓動までが聞きとれるようで、覗いているのが苦痛だった。四メートルほど上がテラスになっているのがわかるが、岩全体がオーバーハングしているように見え、やめろ、やめろと、私は心の中で呟いていた。しかし、ふたたび男は動きはじめた。気味わるいほどじりじりと移動してゆく。私は目を離していた。何分かたち、見ると、テラスまであと一メートルの場所に人影がいた。どうしてそれだけ早く動けたのか私にはわからない。そこで止ってしまった。足も胴体も頭も左右にひろげられた腕も全く動かない。いや、右手だけが上方を探っている。そろそろと岩を這い、手がかりを求め、ついに求められず、そろそろとそれが引っこめられ、元のホールドに返った。ながい静止のあと、もう一度同じ試みがなされ、同じように彼はやめた。今度

は男は別のことをやった。膝が曲げられ、身体がちぢこまり、それから真直に上方に伸ばされた。と、ねじくれた身体がふわりと浮き、岩から離れるように見えた。私は目をそむけた。嘗て私はこの耳で仲間の肉体が岩と共に落下してひしゃげる音を聞いたことがあるのだ。——一秒たち、二秒がたった。私はなお数十秒を、数分を待った。首をあげて絶壁を見ると、人影はまだそこにくっついていて、双眼鏡で覗くと、身体をテラスに引上げるところで、上半身は見えず、無声映画のようにズボンからでた跣足の二本の足がゆらいでいた。

男はテラスの上に立上ったが、その動作は少なからず異様だった。私は彼がへばりきっているのかとも思った。しかし彼は、二三歩ふらふらと右に動き、左に動き、休むでもなく、上の岩を調べるでもなく、ぼんやりと佇み、それからいきなり岩にとりついた。テラスから絶壁の頂きまでは傾斜もゆるそうで、突出の多い岩からできていたが、それにしても彼の登り方は尋常ではなかった。岩を攀るには一定のリズムがあるものだが、彼のリズムは人間のそれよりもっと動物的な、生と死とがずっと単純化している下等動物のそれを思わせるところがあった。いつか私は自分の目が信じられなくなり、双眼鏡を離して肉眼で見た。その方が気が楽で、石堀をよじてゆくダニかなにかを見ているのと大差がなかった。ぼつんとした影が絶壁の上に消えてしまうと、私は足許にころがっているアルミニウムの蓋を取りあげ、ハンカチで付着した砂粒を丁寧にくぐいさり、ウイスキーをそそいだ。高山では酔い易い。不断の私なら決してそんな真似はしなかったらう。

二時間ばかりのち、私は岩ばかり重なりあつた山頂にいた。向こう側に口をあけた谿間から吹きあげてくる冷い風が、急速に私の肌から汗と熱を奪い、セーターをだして着こんでも寒いくらいだ。私は岩かげに坐り、残っていたウイスキーの最後の一杯を飲んだ。

雲の低い割に視界がひらけていた。岩の尾根はうねりながら低まり、盛りあがり、鋸歯に似た凹凸を見せながら他の尾根へと続いている。峰々はそれぞれ胸郭をさらけだして立ちはだかる巨人だったし、なだれている岩の破片は絶間ない風化に痛めつけられた露わな皮膚だった。風が凄じい音を立て、私の坐っている岩峰をゆすぶるような勢いですぎる。

ようやく私はザックを背おい、かたわらのケルンの上に手頃な平たい石を一つ載せてから歩きだした。尾根はいくつかに別れ、しばしば私はケルンを探すために立止り、そのたびに耳たぶをかすめてゆくむせぶような風音を聞いた。片側の谿間では、灌木の枝や這松の海がうねるのが見える。だがもう一方の谿間は、さきほど私が登ってきたときと同様、しずまりかえていた。風はこの岩尾根を境にして、灰一色の空に吸いこまれてしまうもののようなのだ。足許からの風をうけながら、私は蹠跟と歩いた。不思議な気持で、覚めきらぬ夢の中とか、或いは麻薬でも用いたとき、こんな状態を味うのかも知れない。なるほど私は両側の谿間を一目で見渡すことのできる剣の刃わたりのような尾根道を辿っているのだったが、同時に這松の中に横たわって蠅にたかられてもいたし、一枚岩にとりついて手懸りを探してもいた。それはいくらかは違った状態だった